

話者交替における二者間バイアス解消ストラテジーの解明

宮崎 太我^{1,a)} 榎本 美香^{1,b)}

概要：本研究の目的は、話者交替における二者間バイアスに三人目がどう割って入るかを解明することである。二者間バイアスとは、「現在の話者の直前の話者が次話者になりやすい」(A → B → A) というものである。資料として、千葉大学三人会話コーパス中の7組分(計66分2秒、計21人分)を用いる。分析対象は、話者交替が生じている箇所において、三人中の二人(A,B)が4回以上ターンを取った後に残る一人(C)が発言する箇所とする。発話内容を分類したところ、横槍を入れる、前の発話を詳細化する、知識的権限に基づく、独り言をいう、誰にともなく発話する、宛先を得て話す、セカンドストーリーを語る、司会者的な発言をする、の8つが得られた。この中でも、それまでの話題にメタ的な横槍を入れる発話では、直後に3人会話へと移行することが多く、二者間バイアスを解消するのに有効なストラテジーであることが明らかになった。

キーワード：話者交替、二者間バイアス、ターン取得、参与方略

Clarification of the strategy of closing up the two-parties bias in turn-taking

TAIGA MIYAZAKI^{1,a)} MIKA ENOMOTO^{1,b)}

Abstract: The purpose of this study is to clarify how the third party gets into the two-parties bias in turn-taking. The two-parties bias means that the previous speaker(A) of the current speaker(B) is likely to be the next speaker(A → B → A). The analysis data are the seven pairs in the three-person conversation corpus of Chiba University (total of 66 minutes 2 seconds, total of 21 people). We extract the turns which taken by the third participant after the 4 turns which uttered by other two parties. We classify the utterances based on the contents into following 8 categories: Sideswipe(36%), Elaborate(33%), Show own knowledge(17%), Say to no particular one(5%), Mutter to oneself(3%), Talk second story(2%), Talk after an addressing(2%), and Talk as a chairman(2%). Among them, Sideswipe that puts meta receding to the topic up to that time, it is often shifted to three-parties turn-taking immediately after, and it turns out that it is an effective strategy to eliminate the two-parties bias.

Keywords: turn-taking, two-parties bias, take turn, strategies of a participation

1. はじめに

対話ロボットは、早稲田大学・小林哲則研究室のROBITA、ATRのRobovie、大阪大学・石黒浩研究室のERICAなど、身体をもち人間と多様なインタラクションの可能性を広げている。その中でも興味深い研究として、秋葉ら[1]の多人数会話における「置いてけぼり」にされたロボットがある。会話の切れ目を計算して会話に復帰するアルゴリズム

が提唱されている。ただし、その方法は、突然相手に質問する、いきなり新規話題を始めるなどやや乱暴である。会話から取り残された者が再び口を開く時にどういった発話内容にすればよいかを決めるためには、やはり人間同士の会話に礎を置くしかないだろう。

Sacks, Schegloff, and Jefferson[3]が提唱している話者交替規則は、会話参加者の人数に関わらず誰もがターン(発話権)を取れるシステムになっている。ターンはターン構成単位とよばれる単位から構成され、その終端は母語話者の聞き手なら誰でも予測できる。そして、その単位が終わると話者交替にふさわしい場所である話者移行適格場

¹ 東京工科大学メディア学部
Tokyo University of Technology

^{a)} m011727125@edu.teu.ac.jp

^{b)} mika.enomoto@stf.teu.ac.jp

(transition relevant place; TRP) となる。TRP までに、話し手がある 1 人の聞き手に呼びかけるか視線を向けるかして (宛先をあてていて)、質問や確認など隣接ペア第一部分となる発話をすれば、その聞き手が次話者に選択されたことになる。一方で、話し手が複数の聞き手に視線を向けたり呼びかけたりしていたり、逆に誰も見ていなかったり呼びかけていなかったりして、陳述や応答など隣接ペア第一部分ではない発話をすれば、聞き手のうちで TRP において真っ先に話し出した者が次話者になる。この場合、どの聞き手も同様に次話者になる権利が与えられることになる。

しかし、Sacks ら [3] は次のようにも指摘する。会話参加者が 3 人以上の時、順番順序に偏りが生じる。「直前の話し手が次の話し手に」なりがちだという。これを高梨 [4] は「二者間バイアス」と呼んでいる。例えば、3 人 (A,B,C) の会話において順番に A → B → C や C → B → A など、3 人が順番に話者交替を行うのは珍しい。往々にして、A → B → A や B → A → B などのように、直前の話し手が次の話し手になりがちだというのである。この時、3 人目 (C) に話者交替の機会がなく、会話から取り残されてしまうことになる。

榎本・伝²では、3 人会話において同じ 2 人がやり取りを継続するケースが約 4 割 (256 発話交換のうち 104 回) あるとしている。この結果は、会話においては往々にして、二者間バイアスが生じることを意味する。そこで、本研究では、話者交替中に生じている二者間バイアスに対して 3 人目がどのような発話内容で参加開始するか、またどのような発話をしたら、その後 3 人の話者交替が復帰するのかを明らかにする。

2. 方法

2.1 分析資料

千葉大学 3 人会話コーパスの 7 会話を分析資料とする。友達同士の 3 人の雑談で、1 組あたりの会話は約 9 分 30 秒であり、計 66 分 2 秒となる。各会話の前にサイコロを振って話題 (「情けない話」「ビックリした話」「びびった話」「恋の話」「腹の立つ話」「当たり目 (「臭い話」か「大事件」)) が与えられるが、参加者は自由に話題を変えて良い。

2.2 話者交替箇所の抽出

会話は話者交替とストーリーテリングの 2 つのフェーズからなる。話者交替は、会話において話し手が次々と変わるフェーズである。ストーリーテリングは、1 人の話し手が自身の経験や知識を語り続けるフェーズである。本研究では、話者交替箇所のみを分析対象として抽出する。

2.3 3 人目の発話の抽出

話者交替箇所から、3 人中の 2 人だけが発話していて、3

人目が取り残される「二者間バイアス」区間を抽出する。具体的には、参加者 3 人中の 2 人 (A,B) が 2 回以上発話交換した後、残る 1 人 (C) が発話する箇所とする。該当箇所は 60 箇所である。

3. 分析 1

分析 1 では、二者間バイアスにより会話から取り残された 3 人目が、どのような発話内容によって話者交替に再び入るのかを明らかにする。

二者間バイアスによって話している二人の間に、残る 3 人目が復帰した箇所を分析し、どのような発話内容になっているかを明らかにする。対象となる 60 箇所を分類した結果が表 1 である。以下に詳述する。

3.1 横槍

二者で話している内容にメタ的な意見や揶揄を差し挟むものを「横槍」とする。他の 2 人が話している内容と水準の異なるメタ的な発話をするのであり、今までとは異なる視点を提供するものである。

事例 1 では、A と C がサークルについて話している。A が音楽部に入りたかったと話し、C が合唱団に誘っている。しかし A は、今入っているサークルの縛りが厳しいからと、間接的に入れないことを示している。そして、話の内容はサークルの取り組み方になり (01,03,04,07,14,17)、B が (25) で、「サークルってこうどこに (T_センビ-|線引き) (0.163) どこで線引きするか難しいよね」と、サークルの線引きについて話の視点を移し替えている。

(事例 1) 0332:1.31.169-2.33.938

01 C: 来ない人とかいないの
02 A: (D_ナ)
02 A: いる(0.138)けど:
04 A: やっぱ(0.166)良くは思われぬ[みたいな]
05 C: [(I_あー)]
06 A: いいじゃんね:
07 A: サークルなんだから[ね]:]
08 B: [<笑>]
09 C: [ね:]ね[:]
10 A: [どう][でもいいじゃん
ねそん]]なのね:と思うんだけどね:
11 C: [そうよね: []]
12 B: [(I_う
ん)]
13 A: やっぱり
14 C: でも:たしかにいないと(D_ン)迷惑[かかっちゃう[ような
]][:活動だよね]
15 A: [(I_うー [ん)
]]
16 B: [(I_うん)]

表 1 二者間バイアス後の第三者の発話内容とその生起頻度

名称	内容	生起頻度	生起割合
横槍	二者で話している内容にメタ的な意見や揶揄を差し挟む	22	36%
詳細化	先行する発話に出てきた言葉を用いてより詳しい内容を聞き返す	20	33%
知識依存	自身が持っているより詳しい知識を話す	10	17%
投擲	誰に向かってでもなく自分の意見や感想を無責任に差し挟む	3	5%
独り言	低いトーンで視線を誰にも向けず、独り言を挟む	2	3%
セカンドストーリー	二者が会話している内容に類似した体験談を語る	1	2%
宛先取得	話し手が視線によって第三者を次話者に選び、選ばれた第三者が発言する	1	2%
司会者的な発話	二者の会話が一段落したとき、第三の者が司会者のような発話をする	1	2%

17 A:
[やっぱみんな(0.197)かなり]真面目な:気持ちで取り組んで
らし[く]
18 B:
[(I_ふ)う[ん)]
19 C: [(I_へ)え [:]
20 A: [(I_あ)すいま][せん]って
21 B:
[(I_ぶん)]
22 A: <笑>
23 C: そう[なん]だ
24 A: [<声>]
25 B: サークルってこうどこに(T_センビ-|線引き)(0.163)どこ
で線引きするか難しいよ[[ね]]
26 A: [[(I_う)ん]]
27 C: [(I_うー)][ん]
28 B: [(I_うん)]
29 A: でもマンドリンとか合唱団とかもさ[:]
(2.198)やっぱ[演奏]会とか目標があるから:
30 C: [(I_うん)]
31 B: [(I_うん)]
32 A: [(0.92)][厳 []し]くないですか
33 C: [(I_ええ)]
34 B: [(I_うん)]
35 C: [<笑>]
36 C: (I_え[え)厳]しいですと[も:]
37 A: [(D_ん)]
38 A: [(I_うん)]
横槍 22 回 (36%) と 3 人目の発話内容の中で最も多く使
われている。

3.2 詳細化

先行する発話に出てきた言葉を用いてより詳しい内容を聞き返すものを「詳細化」とする。直前の発話等を反復して用いる事によって、詳しい内容を聞くために話題を転換する特徴を持っている。先行する発話に出てきた言葉を用いてより詳しい内容を話すよう促すため、修復に近くなる。事例 2 では、A が男の先生のいじりについて話している (01)。その話を聞いた B は (04) で、「(W_ウチュ|うち)ね (.) たぶん (0.121) 女子高だったんだけど: それがなくって:」と B の高校時代の男の先生について話している

(06,07)。続けて B が (10) で、「理系はほとんど女性の先生が教えてて:(0.509) 男の先生は (0.158) なんか聖書科とかね (0.394) 社会科とか」と話し、理系はほとんど女の先生で、男の先生は聖書科や社会科にいと、男の先生に出会うことが少なかったと示している。そこで C が (17) で、「聖書科」と、聞き慣れたことのない学科について詳しく話すよう聞き返している。

(事例 2) 0132:8.36.483-9.11.421

01 A: で知ってる先輩なわけだ[からその先生の奥さん]
02 C: [(I_うん)(I_うん)(I_うん)]
03 C: そっか
04 C: (W_ウチュ|うち)ね(.)たぶん(0.121)女子高だったんだ
ど: それがなくって:
05 C: なんか今思えば(0.415)(D_ウ)しっかりしてたの
06 C: というか(D_ヒ)(.)奇妙だったのが:(0.354)男性の先生
は必ず:(0.495)まず(0.366)文系だったの
07 C: 理系の先生で男性の先生ってい-たった一人しかい
かったのね
08 C: (I_ぶん)]
09 A: [(I_うん)]
10 C: 理系はほとんど女性の先生が教えてて:(0.509)男の先生
は(0.158)なんか聖書科とかね(0.394)社会[科とか]
11 A: [(T_セイ)-|聖書)聖書
科
12 C: 聖[書科があったんです]
13 A: [普通の高校には]ないね
14 C: (I_え)
15 C: 聖[書科に二人]先生がいたのが[二人とも男性だっ
の
16 A: [聖書科]
17 B: [聖書科]
18 C: (I_うん)
19 C: 聖書についての授業を行う
20 B: 聖職って(W_ヒコエ|聞こえ)
21 C: いやご[め]ん(T_セイ-|聖書)聖書科
22 B: [<笑>]
23 C: (D_ん)(.)バイブルです
詳細化は 20 回 (33%) と 3 人目の発話内容の中でも 2 番
目に多く使われている。

3.3 知識依存

二者で話している内容について、自身がより詳しい知識を持っている場合、それを発話するものを「知識依存」とする。自身の関連した知識や経験を発言することによって、会話に参加できるという明示をする。もしくは、他の2人より自身の方が知識があること、ひいては自分に話す権限が有ることを示すものである。事例3では、Bが、自分の部屋がくさいと話し、それを聞いたCが、Bのコートがくさい(01,04)と話し始めた場面である。くさいことを指摘されたBは、(16)で「ファブリーズしなきゃ」と対処法を示している。それを聞いたAが(20)で、「ファブリーズってさ:つけすぎるとくさくさんの知ってる」とファブリーズのデメリットについて話している。そこからファブリーズについての話(24,25)に移り変わっている。

(事例3) 0532:8.27.547-8.45.578

01 C: あたし[(R_テン)]ちゃん[(0.124)]
02 B: [<笑>]
03 A: [<笑>]
04 C: (R_テン)ちゃんさ:[(0.[444])](F_あの)(.)コートくさい
05 B: [(I_うん)]
06 A: [<笑>]
07 B: (I_あ)くさいか[モ]
08 C: [(I_うん)]
09 C: ちょっと今日思った
10 C: (I_あ)
11 A: <[笑]>
12 C: [<笑>]
13 C: <声>
14 B: ふわって匂[う]
15 C: [(I_うん)]
16 B: [ファブ]リーズしなきゃ
17 C: [ふわって]
18 C: ね<笑>
19 A: <笑>
20 A: ファブリーズってさ:つけすぎるとくさくさんの
ってる
21 C: 知[らない]
22 B: [知らな][:] [いい]
23 A: [<笑>]
24 C: [[香][り付きじゃ]なくても?]
25 A: [[く][さくなる]よ:]]
26 B: [そうなの]
27 A: (I_うん)
28 A: くさい<笑>

知識依存は10回(17%)と3人目の発話内容の中で3番目に多く使われている。

3.4 投擲

二者が会話している途中や合間に、誰に向かってでもなく自分の意見や感想を無責任に差し挟むものを「投擲」と

する。前の発話との繋がりが不明確な発話で開始することが多い特徴がある。このような無責任な発話となってしまうため、それまでの会話を止めてしまったり、場の空気を変えてしまうこともある。事例4では、BとCがPCについて話している(01,02)。更にBが(05)で、「二つCPUあるのとおんなじだから:」と話す。それに対してPCの難しい話についていけないAが、疑問を感じ、(07)で、「ほんとかよおい」と、意見を挟んでいる。

(事例4) 0232:8.05.213-8.27.303

01 B: なんか:(T_シ-|仕事)(T_シ-|仕事)仕事しても:
0.221)(W_ダラ|だから)作業が(0.24)プログラム動い
ても:(0.933)アウトルックとかが:すばやく立ち上
る
02 C: (I_あ-)そういうことか
03 B: (I_うん)
04 A: (I_えー)
05 B: 二つCPUあるのとおんなじだから:
06 C: (I_(W_ウーン|ふ[うん]))
07 A: [ほん]と[かよ] [おい]
08 C: [(I_あ-)] []結構いいか
もしんな[いねそ] [れ]
09 B: [(I_うん)]
10 A: [よ]くないよ
11 B: でもその分プログラム(W_ハ|が)走んのが遅くなっ
やう
12 A: だめじゃん
13 B: (I_うん)
14 B: [だから(.)]その仕事だけする場合はね
15 A: [ほんとに]
16 B: (I_うん)

投擲3回(5%)は、5%以下と3人目の発話内容としてはあまり使われないことがわかる。

3.5 独り言

二者が会話をしている途中や合間に、独り言を挟むものを「独り言」とする。声のトーンが低く、視線を誰にも向けていないなどの特徴がある。投擲とは違って、前の発話との繋がりを持っていることから、二者の会話内容に興味を持っているという特徴が観られる。そのため、2人のターンとは関係なく、自身のタイミングで発話することができる。事例5では、BとCが1月に演奏会とテストがあり、忙しいという話をしている(01,02)。そしてCが、演奏会か何かの打ち上げをした次の日の一コマから講義に出て(13)、ハードスケジュールだったことを明かしている。Cの話を聞いたAは(17)で、「つらい」と、Cの気持ちに寄り添うように発話している。

(事例5) 0332:3.11.917-3.33.351

01 B: (I_あれ) 去年は一月の前半だったよ[ね]
 02 C: [(I_うん)]
 03 C: そうそう
 04 B: (I_うん)]
 05 C: [冬]休み:すぐだったから
 06 B: (I_うん)
 07 B: まだ:[(0.832)テスト]前だったよね
 08 C: [(I_ふん)]
 09 C: (I_ふん)
 10 C: テス[ト [前(W_ヤッ|だ)た]け]どね:]
 11 B: [(I_うん)]
 12 A: [(I_うー)]ん)
 13 C: でも:打ち上げして次の日一コマから出たよ
 14 A: (I_あ[あ]) [<笑]>]
 15 B: [(I_)お[[-]:)]
 16 C: [[<笑>]
 17 A: つ[らい]
 18 C: [予習]を[冬休]み前にして
 19 B: [(I_あー)]
 20 C: [(0.[686]])]全]然覚えてなかつ[た]
 21 A: [(D [_ツ])]<]笑>]
 22 B: [(I_う)[わ:]
 23 A: [が]んばった
 [ね:]][でも](T_チャン-|ちゃんと)[(0.473)ねちゃん]
 24 B:
 [(I_)うわ]]
 25 C:
 [が]んばったよ:]
 26 A: と予習するあたりがえ[らいよ][あ]んた]
 27 C: [え]らい][で]しょ]う
 独り言 2 回 (3%) は、5%以下と 3 人目の発話内容として
 はあまり使われないことがわかる。

3.6 セカンドストーリー

二者が会話している内容に類似した体験談を挟むものを「セカンドストーリー」とする。これは、他の 2 人の会話内容の体験と類似した体験をした場合でないといけない発話であり、自身の体験を披露するという形で「知識依存」に近い発話となっている。

事例 6 では事例 6 では、B が高校の教育実習に行った時話を話している (01)。B が実習生の恋話に徒たちが食いついた出来事を話すと (01,03,05)、A は学校と塾の教師違いにつて話し出す (10,11,13,16, 19)。A の「なんか (0.318)(D_ヤ) クラス中にさ一人でもそういう先生の彼女ってどんな人ですか:とかいう発話するなんかこう (0.767) トリガーとなる子がいるとさ:」(26) に対して、B が「トリガー」と反応する、C が「わたし今持ってる [クラスみんな] トリガーばかりだからすごくいや」と自身の体験談を語りだす。

(事例 6) 0132:5.51.442-7.23.876

01 B: こう最後になんでも話してもいい(0.141)時間を作るうってことになって:(0.888)その:実習生が(0.309)生徒に向かっ

て:(1.076)別にまその場で思いついたことを一時間ぐらい話すっていう時間があったんだけども
 02 B: も全部もう(0.263)そういう(0.495)恋の話についての
 03 B: (0.174)質問に[答えるっていう時間になってしまっ]て
 04 C: [(I_ふう:ん)]
 05 C: (I_うん)]
 06 A: [(I_うん)学]校の先生とかだと逆にやり易くない
 07 A: (F_その)授業以外でも一緒にいるから:[(0.901)]ちよつと人間(0.619)らしさがまだあるじゃん
 08 C: [(I_うん)]
 09 A: なんか塾の先生とかって[ほんとに(0.643)]
 10 B: [(I_あー)]
 11 A: 要点だけ教えてくれて:(0.296)受験テクニックとか(0.682)勉強の内容とか教えてくれる:
 12 A: ちょっとマ[シー的な]も]のとして(0.377)見てる人が多い気がして:
 13 B: [(I_うん)]
 14 B: (I_うん[)]
 15 A: [だ]か[ら急(W_イ|に)(.)急に][[そ]う
 16 B: [手段]だもん]][ね]
 17 A: 急になんか(F_その)自分の生活に近いような発言をされるってちょっとびびるっ
 18 A: て[いう]子が(0.58)[多]いような気が]
 19 B: [<笑]>]
 20 C: [(I_)うーん)]
 21 B: そうか: 塾だからかな:
 22 B: 学校だともうちょっと(0.653)なんて言うか人間的
 触れ合いを求められてんの
 23 B: [かも]][しれないけど]
 24 A: [わかん(W_ナ|ない)] [学校にもよるんじゃ](W_ナ|ない)
 25 A: なんか(0.318)(D_ヤ)クラス中にさ一人でもそういう先生の彼女ってどんな人ですか:とかいう発話するなんかこう(0.767)
 26 A: トリガーとなる子がいるとさ[:]
 27 B: [<][笑]>]
 28 C: [笑>]
 29 A: [[<]]][笑>]
 30 B: [ト[リ]]ガー]
 31 C: [<笑>]
 32 C: [わたし今持]ってる[クラスみんなトリガ]ーばかりだ[から]すごく嫌だ]
 33 A: [ぐあ]つとこう]
 34 A: [笑>]
 35 C: <笑>
 36 C: み:んなもう勝手なこと[しゃべ]ってて]
 37 A: [笑>]
 38 C: [な[かなか]まと][ま]んないんだよ]
 39 B: [<]][笑>]
 40 A: [それ:やら]][れると]困るけど
 41 A: でもそう(W_ス|する)となんか(0.442)(I_あ)いいんだそ
 ういう話してもって
 42 A: 霧[囲]][氣に(.)急に変わ]る]でしょう
 43 B: [(I_)うーん)]

44 C: [(I_うん)(I_うん)]]
45 A: 特に中学生ぐらいとかだと急に変わるじゃん
46 A: クラスの(0.622)雰囲気とかって
47 A: わかんない
48 A: わたしがいたのは女子高だったので:(0.417)トリガーだらけだったのでもう
49 A: [(0.324)ものす]ごいうるさかったんだけど:
50 B: [<笑>]
51 B: (I_へえ:)
52 B: [女子]高の(0.811)授業って(0.344)どんな感じ
53 A: [(I_うん)]
セカンドストーリー 1 回 (2%) は、5%以下と 3 人目の発話内容としてはあまり使われないことがわかる。

3.7 宛先取得

二者間バイアスのうちどちらかが、視線によって第三者を次話者を選び、選ばれた第三者が発言することを「宛先取得」とする。こちらの方法は、最も自然で話者交替規則に基づくものである。この 8 分類の中で唯一自らの率先行動ではないものと言える。
事例 7 では、A と B がどのように恋の話をするか話しているが、A は 13 で突然鯉の話始める。そのとき、A の視線が C に向けられていたため、16 で C が「(I_あー) そっちですね」と反応し、ターンを取れている。

(事例 7) 0732:0.48.050-1.01.013
01 B: いつもの調子で[話す]んじゃないかって説が
02 C: [(I_はい)]
03 A: (I_あー) (I_え) だめなんだ
04 A: テープの回ってるとこで話さな[い][そ][んなの]
05 B: [(I_)[あー]][[そう]な]んだ
06 A: (I_うん)]
07 C: [そ [う]
08 B: [<声>]オフ][レコなん]ですね[:]
09 C: [(D_ん)]
10 A: [(I_うん)]
11 B: でもいっぱい話すんだ
12 A: (T_コ-|恋)[(T_コ-|恋)]]恋の話って言えばあれだね
13 B: [(D_ウ)]
14 C: [(D_ん)]
15 A: (F_あの)(W_イバラギ|茨城)で鯉がいっぱい死んだね
16 C: (I_あー)そっち[です][ね]
17 A: [そう][[(I_うん)][[でも]そ]っから話
どうやって膨らませようか
18 C: [(I_)[はい)]]
19 C: (I_うーん)
20 A: 鯉あれヘルベスだっつってたね
宛先取得 1 回 (2%) は、5%以下と 3 人目の発話内容としてはあまり使われないことがわかる。

3.8 司会者的な発話

二者の会話が一段落したとき、第三の者が司会者のような発話をするを「司会者的な発話」とする。この発話は、次の会話の進行を司るものでもある。そもそも、一端直前のやり取りが終了していた箇所といえる。

事例 8 では、A と B が消化と体の関係性について話している(01,02)。05 の A の発話で会話は一度終結する。その後、B が「話題を止めるつっこみか」(10) と会話を続けようとしたが、また会話は止まってしまった。自分の発話の失態に気づいた A が「や:ばいな」(12) などと発話するも、間ができてしまう。そのタイミングを見計らった C が「(I_はい)」(13) と視線手によって A を次話者を選び、そこから会話が仕切り直される。

(事例 8) 0232:1.46.875-2.09.996
01 A: (T_カラ-|体)(.)[体には悪いかも知らんけ]ど
02 B: [栄養の吸収率が違うんじゃないの]
03 C: (I_[あー][:])
04 B: [(I_うん)]
05 A: [なん]で
06 B: すご%[い(.)] [な] [<笑>]
07 A: [<笑>]
08 C: [<] [笑]>
09 A: []<[笑]>
10 B: [話題を止める[つっこみ
か] [<笑>]
11 C: []> []<笑]>
12 A: や:ばいな こりゃ
13 C: (I_はい)
14 A: (I_はい)
15 A: <[笑> [] [(D_ん)な][[がれたか][今]
[<笑]>]>]
16 B: [(I_は:はい)[じゃねえよ]<[笑>]
[<笑]>]>]
17 C: []<笑]> [] [今同] [] [時]に
[(W_ジガツ|違)た][今] [<笑>]
18 B: ちょっとトピックスを:(.)提供して

司会者的な発話 1 回 (2%) は、5%以下と 3 人目の発話内容としてはあまり使われないことがわかる。

4. 分析 2

分析 1 で示した発話をした結果、3 人目が話者交替に復帰できたかどうかを分析 2 では調べる。

3 人目が発話した後、以下の 3 つのパターンに分かれることが予想される。1 つ目は、「2 人から 3 人へ」、2 つ目は、「2 人から別の 2 人へ」、3 つ目は、「2 人のまま」である。

1 つ目の「2 人から 3 人へ」は、図 1 のように A,C の二者間バイアスから、3 人目の B が「そういうくさいなの」と会話に復帰し、そこから 3 人が交互に話者交替するとい

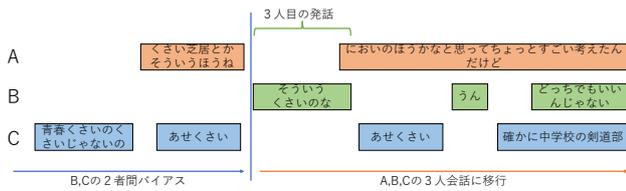


図1 2人から3人へ移行

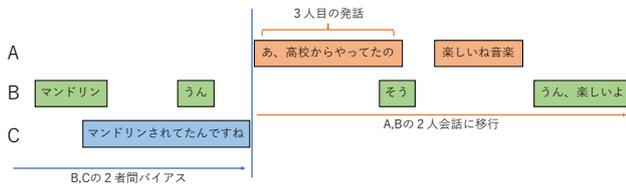


図2 2人から別の2人へ移行

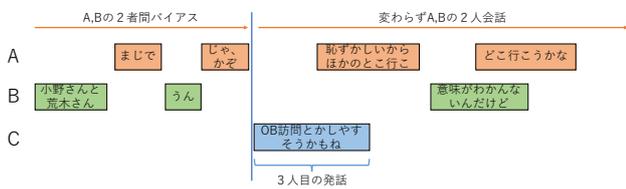


図3 2人のまま

うものである。

2つ目の「2人から別の2人へ」は、図2のようにB,Cの二者間バイアスから、3人目のAが「あ、高校からやってたの」という発話で会話に参加し、二者間バイアスの1人だったBがそれに反応して、今度はA,Cの二者間バイアスが始まるというものである。

3つ目の「2人のまま」は、図3のようにA,Bの二者間バイアスへ、3人目のCが「OB訪問とかしやすそうかもね」という発話を挟むものの、他の2人からの反応はなく、A,Bが二者間バイアスを続行するというものである。

4.1 3人目の発話内容・復帰後パターンの生起頻度

分析2の結果、表2のようになる。以下詳述する。

横槍、2人から3人へ12回・2人から別の2人へ5回・2人のまま5回と、「2人から3人へ」の生起頻度が復帰後のパターンとして多い。横槍は、メタ的な意見や揶揄を差し挟み、会話の視点を移し替えることもあるため、3人で話し合う流れになりやすいといえる。事例1を見ると、AとCの二者間バイアスで、二者はサークルについて話している。(47)でBが「サークルってこうどこに(T_センビ-|線引き)(0.163)どこで線引きするか難しいよね」と横槍を用いて会話に復帰している。Bの横槍の発話後、話の視点がサークルの線引きについての内容になり、A,B,Cの3人会話へと移行している。

詳細化は、2人から3人へ8回・2人から別の2人へ9回・2人のまま3回と、「2人から別の2人へ」の生起頻度

表2 3人目の発話内容・復帰後パターンの生起頻度

発話内容	頻度	復帰後パターン	生起頻度
横槍		2人から3人へ	12
	22	2人から別の2人へ	5
		2人のまま	5
詳細化		2人から3人へ	8
	20	2人から別の2人へ	9
		2人のまま	3
知識依存		2人から3人へ	5
	10	2人から別の2人へ	4
		2人のまま	1
投擲		2人から3人へ	1
	3	2人から別の2人へ	2
		2人のまま	0
独り言		2人から3人へ	1
	2	2人から別の2人へ	1
		2人のまま	0
セカンドストーリー		2人から3人へ	1
	1	2人から別の2人へ	0
		2人のまま	0
宛先取得		2人から3人へ	1
	1	2人から別の2人へ	0
		2人のまま	0
セカンドストーリー		2人から3人へ	0
	1	2人から別の2人へ	1
		2人のまま	0

が復帰後のパターンとして多い。二者間バイアスの2人のうち片方の、発話中の言葉を用いて詳しい内容を聞き出すため、3人目と聞き出される人の二者間バイアスになる流れになりやすいといえる。事例2を見ると、AとBの二者間バイアスで、それぞれの高校時代の男性教師について話している。その会話内容の一部にあるCの発話(10)にBが疑問を持ち、詳細化を用いて「聖書科」と反復して聞き返している。Bの疑問にCが答え(19)、そこからBとCの2人会話に移行している。

知識依存は、2人から3人へパターン5回・2人から別の2人へ4回・2人のまま1回と、「2人から3人へ」の生起頻度が復帰後のパターンとして多いことがわかる。知識依存は、二者間バイアスの2人よりも、詳しい知識をもっていることが前提となっているため、3人目が2人に新しい知識を提供して話し合うという、3人会話になる流れになりやすい。事例3を見ると、BとCの二者間バイアスで、CがBのコートがくさいことについて指摘している。指摘されたBは対策として(16)で「ファブリーズしなきゃ」と話している。Bの対策を聞いたAが(20)で、「ファブリーズってき：つけすぎるとくさくなんの知ってる」と、知識依存を用いて、二者間バイアスに割って入っている。Aの

(20) のファブリーズのデメリットに対し、B と C が反応を示し (21,22)、A,B,C の 3 人会話へと移行している。

投擲は、2 人から 3 人へパターン 1 回・2 人から別の 2 人へ 2 回・2 人のまま 0 回である。独り言は、2 人から 3 人へ 1 回・2 人から別の 2 人へ 1 回・2 人のまま 0 回である。セカンドストーリーは、2 人から 3 人へ 1 回・2 人から別の 2 人へ 0 回・2 人のまま 0 回である。宛先取得は、2 人から 3 人へ 1 回・2 人から別の 2 人へ 0 回・2 人のまま 0 回である。司会者的な発話は、2 人から 3 人へ 0 回・2 人から別の 2 人へ 1 回・2 人のまま 0 回である。これらは 3 人目の発話内容としては、あまり使われないことからパターン数も限られている。

5. 議論

本研究でわかったことは、3 人目が二者間バイアスから復帰するための発話を行ったとき、二者間バイアスから離脱するパターンや、別の二者間バイアスになるパターン、二者間バイアスを解消できないパターンに分かれるということである。また、3 人目の発話内容と復帰後パターンには関係性があることがわかる。横槍を用いると、「2 人から 3 人へ」のパターンに移行する傾向が高い。詳細化を用いると、「2 人から別の 2 人へ」のパターンに移行する傾向が高い。知識依存を用いると、「2 人から 3 人へ」に移行する傾向が高い。それ以外は数が少ないので省略する。二者間バイアスを解消し 3 人会話へと移行したい場合は、3 人目の発話内容で最も多く頻出している横槍を用いると良いと推測される。二者間バイアスを解消し 3 人会話とまではいかないが、別の二者間バイアスへと移行したい場合は、3 人目の発話内容で 2 番目に頻出している詳細化を用いると良いと推測される。残りのパターンである「2 人のまま」に移行する場合は、今回の分析結果から数が少ないため、希少なパターンであると推測される。復帰の仕方や、パターンにこだわりがない場合は、横槍・詳細化・知識依存を用いると、二者間バイアスを解消しやすい傾向にあることがわかる。

参考文献

- [1] 秋葉巖, 松山洋一, 小林哲則. 多人数会話ファシリテーションロボットの主導権奪取手続き. 研究報告音声言語情報処理, 2013, P. 1-8.
- [2] 榎本美香, 伝康晴. 3 人会話における発話交換構成員の推移の分析. 社会言語科学学会第 17 回大会論文集, 2006, p. 1215.
- [3] Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 1974, p. 696735.
- [4] 高梨克也. 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法. 2016, ナカニシヤ出版.